五百城 文哉（1863～1906）（左）

五百城 文哉は、日本に自生する植物を西洋風に描いた作品で高い評価を受けた画家で、水戸（茨城県）に生まれた。水戸（茨城県）に生まれ、上京して日本洋画の創始者の一人である高橋雄一（1828-1894）に師事するために上京した。

文哉は日光を訪れたことをきっかけに高山植物に興味を持ち、絵を描くだけでなく、栽培や研究にも力を入れた。日光植物園の設立にも協力しました。また文哉は小杉法庵の最初の師匠であった。

三枚の小花は、文哉の『日光山草図譜』に掲載されているものである。

白馬山（長野県）の高山植物を描いた風景 明治 36 年（1903）頃
肖像画は、弟子の小杉法庵が「亡き文哉先生」と題して描いたものである。

* * *

小杉放菴（1881～1964）（右）

後に放菴と呼ばれるようになる画家は、日光で小杉国太郎として生まれた。最初は五百城 文哉に弟子入りして洋画を学び、その後上京して研鑽を積み、多くのアカデミーや研究所に所属した。洋画、書画、日本画は文部省主催の展覧会で多くの賞を受賞するなど、高い評価を得ている。ユーモアと自然への優しさを感じられる作品を描いている。青春時代を日光の自然の中で過ごし、幼少期の思い出が詰まった作品を発表している。著書『故郷』は、日光で過ごした幼少期のスケッチと回想を集めたもので、星野五郎兵衛のスケッチも含まれている。

大きい方の作品は、コバスのマグノリア（顔料）の中にウグイスが描かれています。

左上：蒙古樺（水彩画）

右上：紅葉菫（水彩画）

左下：オオゲラ（水彩画）

右下 ポヘミアンツグミ（水彩画）